

-水産多面的機能発揮対策事業-
令和6年度 活動報告

活動組織名：甲賀地区景観環境保全会

■ 活動の目標

平成30年度：	活動1年目	… 組織の成員の環境保全意識の向上と実践。
令和元年度：	活動2年目	… 前年の流れでの環境保全活動の円滑な実践。
令和2年度：	活動3年目	… 当初の協定上の活動最終年であり、その総括。
令和3年度：	活動4年目	… 培った海洋環境の保全意識の総括とさらなる持続。
令和4年度：	活動5年目	… さらなる保全活動の進展と、地域間の連携・協力。
令和5年度：	活動6年目	… 環境変動を乗り越え、それに＜克つ（克服する）＞漁民の知恵＞の創出。
令和6年度：	活動7年目	… 被災した輪島海女らとの交流を通じ、磯の変容という難局をとともに考える。

■ 活動実績等

活動項目	活動の内容とその方法	実績・成果	課題
【漂流漂着物、堆積物の処理】	＜モニタリング＞ 東京海洋大学・山川紘博士と藤本准教授の指導のもとヒジキ・フノリなど潮間帯の植生を分析してきた。パンデミック後はその知見で自組織で活動。 ＜海浜清掃＞ 活動開始後に大型台風が二年連続襲来し、その膨大なゴミ処理を女性と地域住民も動員し無事完遂。その後、活動は定着した（高齢者の参加率高い）。	春1回が基本で、年2回の調査を岸（磯場）より行う年もある。 ----- 海浜清掃は、大々的には例年ほぼ3-4回おこない、小規模活動も時化ごとに不定期に行っている（台風一過後などに随時）。	通年かつ年度を跨いでのモニタリング成果の比較を目指す。一方で<u>一年藻の植生の変遷が激しく、戸惑いもある。</u> ----- イセエビ漁の繁忙期10月には、<u>男手の動員が困難となる。高齢者の参加が習慣づけられたのは好ましいが、予算枠を超え、財政的に極めて厳しい。</u>
【藻場の保全】	＜モニタリング＞ もともと対象区域の半分をコドラード法、もう半部分を景観被度により調査してきた。しかし、海洋環境の特性（アラメ場にアカモクも繁茂）に鑑み、令和2年度から景観被度のみに切り替えた。 ＜海藻の種苗投入＞ 当初は成熟したアラメ子葉より採取した遊走子をもちい着底を試み、それを海底に設置した。 ＜母藻の設置＞ スポアバッグ法による種付を成員により行っていたが、刺網ゴミの有効活用に切り替えた（右記参照）。 ＜食害生物除去＞ 対象区域の黒ウニ（ムラサキウニ）が磯焼けの進行に歩調を合わせ増大しているため、<u>除去活動の頻度を</u>上げている。さらに先進地の阿久根活動組織（鹿児島県）を招聘し<u>＜廃棄物の利活用＞</u>（令和5年度より着手）の観点から<u>漁民シンポジウム「磯焼けに克つ知恵」</u>を開き（2023年1月）、本年は2日間にわたり開催した。	＜平成30年度＞ モニ5/28, 12/10 / 母藻11/27 / 種苗12/14-15 / 除去7/24 ＜令和元年度＞ モニ11/16 / 母藻11/15-16 / 種苗12/14-15 / 除去6/1, 7/23, 30 ＜令和2年度＞ モニ8/29, 2/4 / 母藻11/28 / 種苗11/17 / 除去6/6, 24, 7/22, 8/29 ＜令和3年度＞ モニ2/17 / 母藻・種苗12/3 / 除去5/30-31, 8/22, 1/28 ＜令和4年度＞ モニ3/20 / 母藻・種苗10-11月にエビ刺網時に随時 / 除去6/27, 3/10 ＜令和5年度＞ 除去7/13, 25 / 種苗11/17, 23-24, 30 ほか ＜令和6年度＞ *母藻の設置/種苗の投入は、現在作業中。*ウニ除去とモニタリングは、2-3月を予定。	活動開始の直後から、活動歴の上積みとともに、それぞれの手法をさまざまな要因により切り替えてきた。<u>モニタリングの時期は</u>ようやく春先に落ち着いた。<u>アラメ母藻は刺網漁で</u>かかってきたもの（遊走子が死滅流出する前の鮮度あるもの）をすぐに回収し、それを設置するようになった。<u>磯焼けの進行のさなか、わざわざ生きた個体を採取するわけにはいかない。</u>これからも新たに工夫せねばならぬ。<u>ウニ除去は、志摩市水産課の事業予算での活動（単独事業）と連動させ、効果を</u>図っている。このサポートは<u>資金難の当組織の運営の助け舟</u>であり、志摩市に感謝している。 <u>漁民シンポジウム「磯焼けに克つ知恵」</u>では、三重県水産振興事業団を通じ全漁連にサポートを賜り深謝している。本年度は、石川県漁業士会長と輪島海女の講演会「磯の変容に克つ知恵」を開いた。

■ 活動組織としての課題と今後

活動年数の上積みとともに、磯＝漁場を守るというメンバーの意識の進展がみられ＜主体的な意識＞が醸成されてきた。2年連続で開いた漁民シンポジウム「磯克 ISO-KATSU」では、招聘した対策先進地の皆様との意見交換を通じ、実際の知見や技術をみずからの地区に還元するよう取り組んでいる。当海域ではカジメ場が復活してきており、早熟性種ではないかとの期待を寄せている。本年度は早熟性カジメ株を発見できなかったものの、来期こそその探索を期しており、その株から「一夜漬け」による基質投入を計画する。また、混成群落が形成されている地帯からアラメ（サガラメ）の復活も目指したい。一方で、漁獲対象種の新規開拓も急務である。
--

■ 活動状況の写真



説明： 県研究所員レクチャー



説明：成熟アラメ子葉の解説



説明：アラメ母藻採取 1



説明： アラメ母藻採取 2



説明：スポアバッグ作成



説明：海中のスポアバッグ



説明：東京海洋大学のご指導



説明：海洋大・山川博士の説明



説明： アラメ遊走子の確認



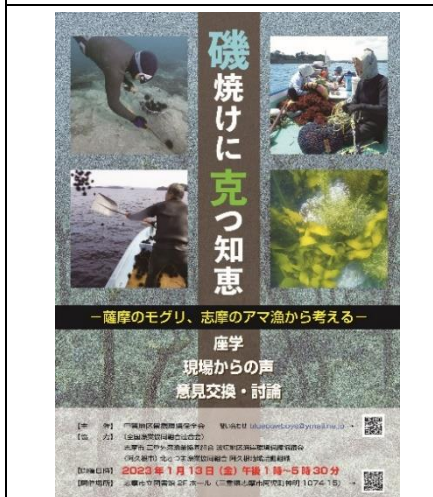
説明：ウニ除去をする海女



説明：ウニ除去作業メンバー



説明：ウニ除去の成果（*高齢海女さん中心の汀からの別働隊あり）



説明：漁民シンポジウム「磯焼けに克つ知恵」2023 のポスター画像



説明：ISO-KATSU2024「磯焼けに克つ知恵」のポスター画像



説明：ISO-KATSU 講演会「磯の
変容に克つ知恵」のポスター画像